



相談室だより

2018年5月

米の山病院：緒方弘征

今回の相談室便りは、米の山病院のソーシャルワーカー緒方が担当します。2012年10月から今年の3月15日まで吉野地区地域包括支援センターで勤務しておりました。この5年6ヵ月に会った人・言葉を紹介します。

「大根の出来不出来にかかわらず、畑仕事をする自然に前向きになる」

80代後半男性。こう続けられます。「いい大根が出来た時は、来年もいい大根ができるように頑張ろうと思う。思うような大根ができなかったときは、来年はいい大根を作ろうと、自然に来年のことを考えてしまいます。土に触れていると勝手に前向きになるんです」。誰もが自分の目標は自分で建てたいという原則を教えてくださいました。

「竹を割ったようなサッパリした性格の女性をお願いね」

90代後半女性。長年一人で暮らされていたが、入浴が一人で出来なくなられ、その際に私が「では、お風呂はヘルパーさんに手伝ってもらいましょうか」と提案した時の返答がこの言葉でした。彼女は、私が提案したヘルパーという抽象的な言葉より、具体的にどんな人なら自分の体を安心して預けられるかを気にしておられました。ケアを受けるということはどういうことか、自分が無抵抗にならざるを得ないときにどういった人に自分の体を委ねたいか、人は制度より先に人に頼るものなんだということをお教えいただきました。

「勝手に問題にするな」

68歳男性。団塊の世代の彼は、地域自治活動の研修で2025年問題の話題になった際、「なぜ、私たちの世代が勝手に世の中から問題視されなければいけないのか！」とやや興奮して続けてこう反論される。「支えあうことは人が生きていくうえで、必然のことだ。支えあいは理想ではない。誰もが他人と支えあって生きている。」彼は、日頃より相互依存ができる校区を目指して奮闘されている。改めて、「自立とは相互依存のネットワークがいつでも使えること」、そのネットワークを地域の方々と作っていくことの大切さを教えてくださいました。

「自分たち家族ではどうしようもないこともあるんです。向き合うしかないんです」

40代男性。父親が認知症になり、幻覚・妄想の日々。訪問し、「お父様の介護、大変ですね」と声掛けした際の返答。「良くなって欲しいけど、認知症は完治しない。父親と僕ら家族がどう付き合うかが重要です」と続けられる。このご家族は、父・母が山地を開墾し農業や畜産を始められ、それを息子夫婦が継いでいる。天気や家畜を相手にすると、思い通りにいかないことのほうが遥かに多いとのこと。父親の病気も、自然なこと・当たり前のこととして捉えられている様子。包括支援センターにおいても、地域の課題に対し直ぐの解決に至ることは珍しい。「解決できる」・「できない」の二軸ではなく、その課題に地域の方と一緒に向き合うことの大切さを教えてくださいました。

「お尻を叩けない子どもがいる」

70代後半男性。毎朝、小学生の登校時に見守り隊をされている。始業のチャイムが鳴った後も立ち続けている彼に声をかけると、「まだあと2人来ていないんだ。気になるからね。」、ちょうどその時、走ってくる一人の児童がやってきて、彼は「ハイ、急いで」と笑顔でその子のお尻をポンと後押しされる。しばらくすると、「もう一人の子は、お尻を叩けないんだよ。おそらく、朝ごはんが食べられない子なんだ」とポツリ。その後、彼は仲間と「地域ふれあい食堂」を立ち上げ、今も続けられている。行動の動機が純粹であればあるほど、行動が継続でき、その想いで人が繋がることを教えてくださいました。

包括支援センターで会った人々・言葉は財産です。この財産を持って、米の山病院でも頑張ります！